1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	0470200395
法人名	社会福祉法人　和仁福祉会
事業所名	ぬくもりの家
所在地 （電話番号）	石巻市大瓜字箕輪17番地 （電　話）0225-23-3822

評価機関名	特定非営利活動法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会
所在地	仙台市宮城野区榴岡４－２－８　テルウェル仙台ビル2階
訪問調査日	平成　20年 7月 15日

【情報提供票より】（平成 20年 6月　15日事業所記入）

（1）組織概要

開設年月日	平成　14年　3月　15日	
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計　　人
職員数	9 人	常勤 8　人，非常勤 1　人，常勤換算 7.9　人

（2）建物概要

建物形態	○併設／単独	○新築／改築
建物構造	木造　平家　造り	
	1 階建ての　　階　～　　1 階部分	

（3）利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃（平均月額）	16,500　円		その他の経費（月額）	22,500　円
敷　　金	有（　　円）		○無	
保証金の有無 （入居一時金含む）	有（　　円） ○無		有りの場合 償却の有無	有／無
食材料費	朝食	300　円	昼食	400　円
	夕食	400　円	おやつ	100　円
	または1日当たり	1，200　円		

（4）利用者の概要（　6月　15日現在）

利用者人数		9 名	男性　　名	女性	9 名
要介護1		6　名	要介護2	0	名
要介護3		3　名	要介護4	0	名
要介護5		0　名	要支援2	0	名
年齢	平均	85.2 歳	最低　75 歳	最高	92 歳

（5）協力医療機関

協力医療機関名	斎藤病院

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

このホームは社会福祉法人和仁福祉会が運営する特養ホームの第二和香園に併設されるデイサービスセンター、居宅介護支援センターと共にある。昔小学校があった場所にあるので、昔を知る地域の人には懐かしさの残る場の筈である。そのことを充分に生かしきれなかったが、現在は、運営推進会議を通じて格段に地域との密着性が高まってきている。日々のケアについての考え方も自己評価作業を研修課題と位置付けるなど、入居者に対するケアサービスは「気付き」が大切だということで取り組んでいる。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	**前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況（関連項目：外部4）** 前回の改善課題は、「理念」と「運営推進会議」についてであった。理念については特に地域との関係を重視し、同法人の特別養護老人ホームを逆にリードするくらいに進化している。その中で運営推進会議の活用も見逃せない。メンバーを仲介者としての地域との密着である。この相乗効果は括目に価する。 **今回の自己評価に対する取り組み状況（関連項目：外部4）** 「気付き」が介護の業務にとって大事なことであることは言うまでもない。自己評価は、どれ位「気付き」が働いているかを評価することにもなるのだから、絶好の研修材料とすることができる。このホームが自己評価を内部研修の一環と位置付けていることは、意義深いことである。
重点項目②	**運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み（関連項目：外部4，5，6）** 今年度から民生委員二人が加わった。会議ではメンバーである区長さんの発案により入居者と「カラオケ大会」を企画し、ホーム主催での地域の催しとして成功させた。ホームの避難訓練について、地域消防団の指導参加を得ているのも、会議のメンバーの力添えによるものである。
重点項目③	**家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映（関連項目：外部7，8）** 家族からはっきり苦情として出されることはない。としても家族から要望として出したいことはある筈だと職員は考えている。家族が面会に来た時や、通院時は家族とのコミュニケーションの機会ととらえ、要望を引き出し、スタッフ会議で検討し、要望が実現できるように取り組んでいる。
重点項目④	**日常生活における地域との連携（関連項目：外部3）** 地区の盆踊り、公民館や市主催の文化祭、行事への参加の他に、区長や民生委員など運営推進会議のメンバーと入居者が中心となって企画した芋煮会やカラオケ大会に地域の老人会や近隣の人達に参加してもらって成功している。

2. 評 価 結 果 (詳 細)

(▒ 部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	昨年度の外部評価での指摘もあり、本年度の理念の策定作業は去年12月のスタッフ会議からスタートした。以降毎月検討を重ね3月末に決定し、4月から実施している。理念目標の重点は「その人らしく」生活できることと、「地域との関係を深める」ための具体的施策である。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念策定時の経過が示すように職員全員に理解されていることは、職員からの聞き取りによっても裏付けられた。日々のケアでの活かし方は，入居者の個性を引き出そうという姿勢に現れている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地区の盆踊り、公民館や市主催の文化祭その他行事への参加の他に、運営推進会議のメンバーと（区長、民生委員）入居者が中心となって企画した、芋煮会や、カラオケ大会に地域の老人会や近隣の人たちに参加してもらい、成功している。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価を内部研修の一環として位置付けていることは評価できる。外部評価についても「理念」や「運営推進会議」について評価結果に基づいて検討し、日々のケアとの結びつきを具体化するなど、無駄にしない努力が読み取れる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は新たに民生委員の方2名がメンバーに加わった。前回の外部評価を活かし、運営推進会議と入居者の共同企画「カラオケ大会」を成功させた。更に双方向での気軽な会議運営を図り、地域との橋渡しとなることをホームでは願っている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市の介護保険課と稲井地区包括支援センターとは事務手続きや、法律に関わる事柄について相談している。その他、ホームの入居者の絵の展示会に来てくれるなど、ホームに対する理解の度合いも深い。		
４．理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	入居者の日常の様子や金銭面の報告など、面会時における職員との対話について、家族の満足度の高いことは家族アンケートからも察知できる。特に通院時は原則として家族が付き添うこととしているが、入居者の状態を医師に説明しきれないので、職員も付き添うこととなる。その機会を家族とのコミュニケーションに役立てているのは貴重である。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族はアンケートの中で「話しやすい雰囲気作りがされている」といっているが、家族としての遠慮が働くことを職員は理解している。あからさまな苦情といったものでなくとも要望として聞こえる事柄はスタッフ会議に出し、要望が実現できるように取り組んでいる。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	その入居者を良く知り馴染みになっている職員という意味で担当制になっている。それだけに職員の異動は安易に行ってはいない。やむを得ず法人内での異動の際は、新しい職員に事前にホームに来てもらい、顔馴染になってから正式異動にするなど配慮している。		
５．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人の内部研修が年間に5～6回ある。グループホーム内の研修は、季節や入居者の変化に対応する形で緊急に行っている。NPO県グループホーム協議会が主催する研修には、全職員が交代で参加できるよう手配している。受講者はその後スタッフ会議で報告し、資料は閲覧できるようにしている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	NPO県グループーム協議会に加入している。県協議会としての研修会への参加の他、県中央ブロックとしての情報交換会がひんぱんに実施されている。他のホーム職員との交流を重視するのは、お互いの困っていることや悩みを出し合い、ストレスの解消につながり、意欲向上の機会ととらえているからである。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用開始前に職員が会いに行き、記憶に障害のある人でも「どこかで見たことのある人」になるまで自宅に通い、ホームに来てもらい、「この人がいる所なら」と安心感をもっていただいてから、利用開始とするように努力している。		
2．新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	入居者の得意分野を日常的に発揮できるように支援している。畑の草取りや収穫、モップで本格的に掃除することを日課にしている入居者もいる。絵の得意な人の作品展示会も開催した。又入居者の豊かな過去の経験から仕事のコツについて若い職員が教えてもらう場面では感謝の言葉を忘れないようにしている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ホームとして特に力を入れていることとして「入居者が自分のしたいことをしたい時にできる」ことをあげている。その前提となるのが、入居者の希望、意向を職員がどれだけ汲み取れるかという力量である。そのことを若い職員が充分認識していることをヒヤリングで確かめることができた。		
2．本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	個別の生活記録、各種チエック表、医師の診断（通院時職員同行）等に基づき、必要な支援計画を立て、月1回のケアカンファレンスを経て作成している。家族からは「ケアプラン実施状況表等に基づいて説明があり、文書で確認できてとても分り易く、話し易い」（家族アンケートによる）と好評である。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	ケアプランに基づいて状況把握を行う、ケアカンファレンスを月1回実施し、3か月に1度見直しを行っている。入居者の変化、医師の診断、家族の要望による場合はその都度期間終了前でも見直しを行なっている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
３．多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	通院時は職員が家族と共に付き添い、医師に状態説明を行なっている。同系列事業所を通じ、地域のケアマネジャーと話し合い、本人の意向に添ったサービスが使えるように支援している。盆、正月には帰宅支援を行っている。		
４．本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族や本人の希望により、かかりつけ医は入居者9人がそれぞれである。通院は家族付き添いを原則としているが、職員が同行することが多い。同行を重視するのは、医師への状態説明や、医師と家族からの話しが日常のケアに欠かせない事柄が多いことに気がついているからである。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	入居時における重度化、終末期におけるホームでの対応について本人、家族への説明や希望などの聞き取りは行なっている。対応についてもホーム内で話し合っている。ホームでの終末期の対応や看取りに近い対応への経験はあるので、それらのことを組織的にまとめ、指針として用意していただきたい。	○	重度化や終末期について、本人、家族の考えや希望を把握するための方法、医師との連携（契約など）、職員の心構え、不安の解消、ケア技術の向上について全体で取り組まれ、対応、指針を策定し、文書化して実施されることを期待したい。
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援 １．その人らしい暮らしの支援 （1）一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	ともすると当たり前ということでマンネリ化し易いプライバシーへの対応について、毎月のスタッフ会議で確認し直し、特に言葉使いや排せつ介助について、リーダーが常に意識して指導し、職員もどんな場面でプライバシーを損ねることがおき易いかを理解している（職員へのヒヤリングによる）。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	展示のために入居者が絵を画いたり、畑の作物の収穫や食材の買出し時に入居者が同行している。職員は「入居者が車に乗ると表情が明るく変わる」と言う。しかし職員の配置の都合などで、入居者の急な希望に応じられない時もある。	○	職員の研修時、通院時の付き添い日などが重なることもあり、必ずしも入居者の希望が全て叶えられる訳ではない。しかしホームとしては諦めずに対応について工夫を探っていることは、入居者にとっての希望であり、叶えられる条件作りを期待したい。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（2）その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	予め同系列法人事業所の栄養士による献立表はあるが、食材買い出しの時は入居者とも話し合って購入している。下ごしらえ、盛り付け、後片付けも手伝ってもらっている。職員も一緒に食べ、食後も会話しながらゆったりと過ごしている。チラシの広告を見て好きなメニューを出前で取ることもある。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	毎日入浴でき、時間についても希望通りとしている。入りたがらない人に対しては、タイミングや声がけを工夫している。ホームが気にしていた重度者対応の入浴については、特殊浴槽ではなく、家庭用風呂の浴槽に台を付けたものが最も障害老人向きとする記述（入浴ケアルネッサンス・三好春樹著）もあるので、参考にしていただきたい。		
（3）その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	この項目に対して管理者、職員は「入居者の日々の生活の楽しみは多い。」と認識している。入居者それぞれの個性、生活歴からして楽しみごとも画一ではない筈で、そのことを踏まえて個別に支援している。入居者に対して感謝の言葉を伝えることの意義も熟知し、入居者からの「ありがとう」は職員の仕事のやりがいにつながっている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	入居者が外出する時は、庭の散歩にしても池の金魚を見るのが目的であったり、近所への散歩にしても、ホームに入居してから知り合った人との立ち話をしたいという思いがあってのことである。職員は外出時のそれぞれの目的を理解している。それがなければ外出支援は成り立たない。		
（4）安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中玄関に鍵は掛けていない。職員は鍵を掛けることがもたらす入居者の拘束感について共有できている。玄関にチャイムはあるが、来客などを知らせるためのものと認識している。近所の人にも見守りや連絡をお願いしている。区長さんと一緒に帰って来た入居者もいる。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	マニュアルがあり、入居者を含めた総合訓練を実施することを事業所規程に明記している。年に2回地域の消防団の協力で避難訓練を実施しているが、今年度第1回目を7月に実施し、民生委員も初めて参加している。岩手、宮城内陸地震の際も消防団の副団長に来訪していただいた。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（5）その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養バランス等については、同法人の特別養護老人ホームの栄養士が献立を作っている。通院時の医師による診断と個別の観察チエック表により食事量や調理にも工夫している。一人ひとりの注意すべき事項については、全職員が共有している。		
2．その人らしい暮らしを支える生活環境づくり （1）居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間は採光、温度、湿度については良く管理され快適である。テレビの音、職員の会話のトーンも適切である。リビングに続く畳み敷きの和室は整然としすぎていないことがよく、昼寝に使ったりしているのもうなずける。廊下には入居者の作品の絵画が展示されているが、どこかなつかしくホームには合っている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族は本人が愛用していた家具や生活用品をホームに持ち込むことを良く理解し持ち込んでいると共に、面会時には季節毎の衣類の入替えや整理、飾り物にも気を使っている。ベッドの高さも適切であり、高齢者が使うという勘所は押さえている。		